

# 牛肉

## ◆飼養動向

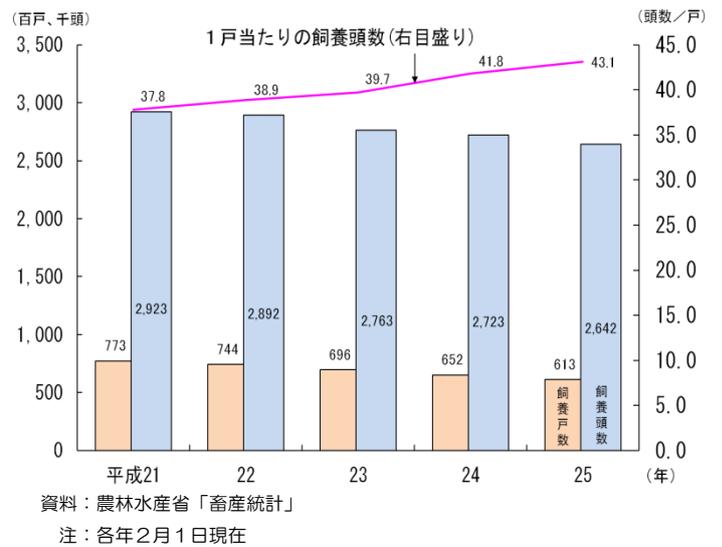
### 25年2月現在の肉用牛の飼養頭数、3.0%減少

肉用牛の品種別飼養頭数を見ると、肉用種は、18年以降、増加傾向で推移していたが、23年以降、宮崎県の口蹄疫発生の影響などにより減少に転じ、25年は176万9000頭(前年比3.4%減)となった。乳用種は17年以降減少傾向で推移し、22年に6年ぶりに増加に転じたものの、23年以降再び減少に転じ、25年は37万5500頭(同4.3%減)となった。交雑種は、18年以降増加傾向で推移していたが、22年、23年と減少した。24年は再度増加に転じ、25年は前年並みの49万7900頭(同0.2%減)となった。この結果、25年の肉用牛の総飼養頭数は、264万2000頭(同3.0%減)と4年連続で減少した。

また、飼養戸数は、生産者の高齢化による廃業などから、25年は6万1300戸(同6.0%減)と減少した。

この結果、1戸当たりの飼養頭数は前年より1.3頭多い43.1頭と、規模拡大が続いている(図1)。

図1 肉用牛の飼養戸数および飼養頭数

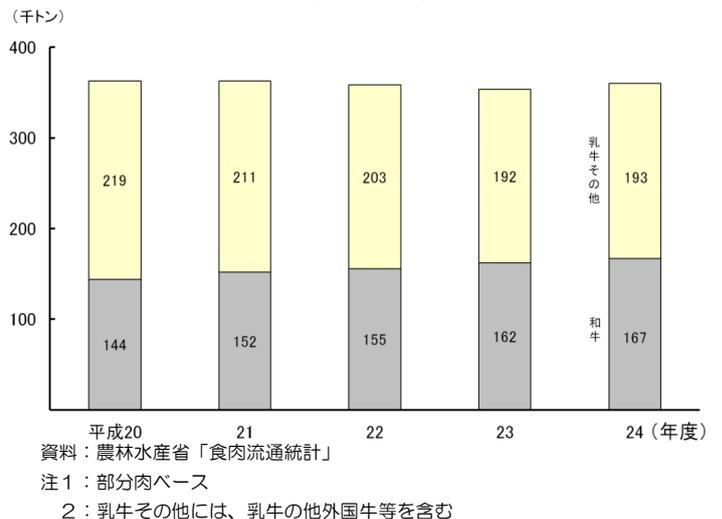


## ◆生産

### 24年度の生産量、1.7%増加

牛肉の生産量は、21年以降、和牛が増加する一方で、乳牛その他が減少したことにより、全体としては減少傾向で推移し、23年度は35万3800トン(前年度比1.3%減)とわずかに減少した。しかし24年度は、22年頃に生乳需給の緩和を背景に、酪農家において黒毛和種との交配が進んだことから、交雑種が7万5500トン(同3.5%増)と、3年ぶりに増加に転じ、和牛も16万6800トン(同3.0%増)と、8年連続の増加となったことから、生産量全体は35万9700トン(同1.7%増)と、4年ぶりに増加した。(図2)。

図2 牛肉の生産量

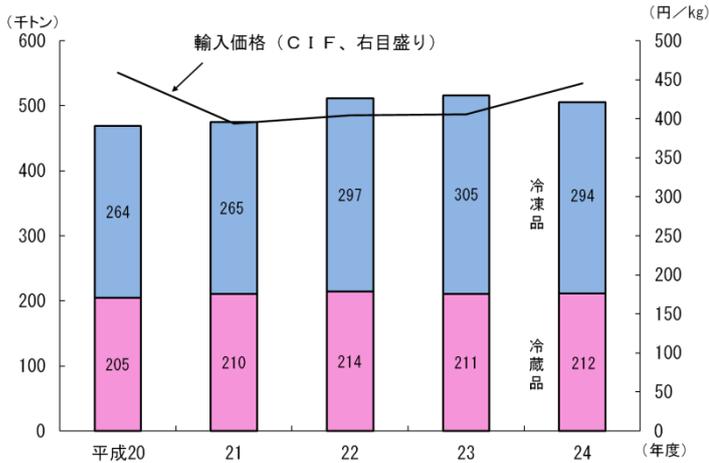


◆輸入

24年度の輸入量、0.3%増加

牛肉の輸入量は、20年度以降増加傾向で推移し、23年度は米国産の増加などから51万6200トン(前年度比0.9%増)と、4年連続の増加となったものの、24年度は、冷凍品の減少などから50万5700トン(同2.0%減)と、わずかに減少した(図3)。

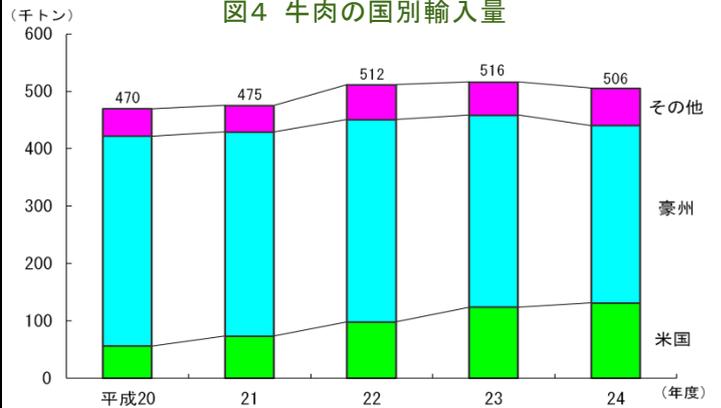
図3 牛肉の輸入量



資料：財務省「貿易統計」  
注1：冷凍品にはくす肉等を含む  
2：部分肉ベース

米国産は、BSEの発生により輸入が停止されていたが、輸入再開以降増加傾向にあり、24年度は13万1600トン(同6.1%増)と、かなりの程度前年を上回った。輸入牛肉の約6割を占める豪州産は、30万9000トン(同7.7%減)と6年連続で減少した。また、豪州産、米国産に次いで多いニュージーランド産(「その他」に含まれる)は、3万1200トン(同6.7%増)と増加した(図4)。

図4 牛肉の国別輸入量



資料：財務省「貿易統計」  
注：部分肉ベース

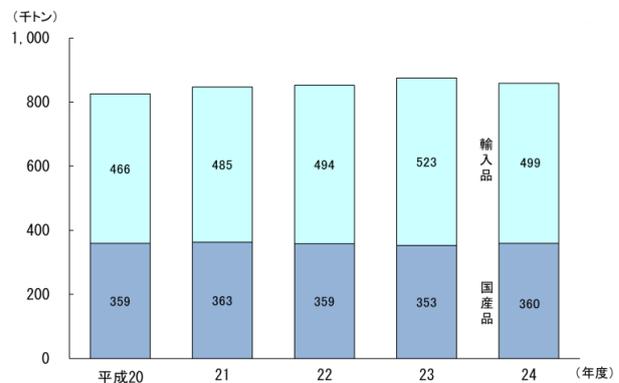
◆消費

24年度の推定出回り量は1.9%減少、家計消費は0.4%減少

推定出回り量

牛肉の推定出回り量は、19年度以降、米国産牛肉の輸入量増加などを背景に増加傾向で推移し、22年度は85万2600トン(前年度比0.7%増)、23年度は87万5600トン(同2.7%増)となった。しかし24年度は、国産品がわずかに増加した一方、輸入品は輸入量減少により前年をやや下回り、全体では85万8800トン(同1.9%減)と、6年ぶりに減少に転じた(図5)。

図5 牛肉の推定出回り量

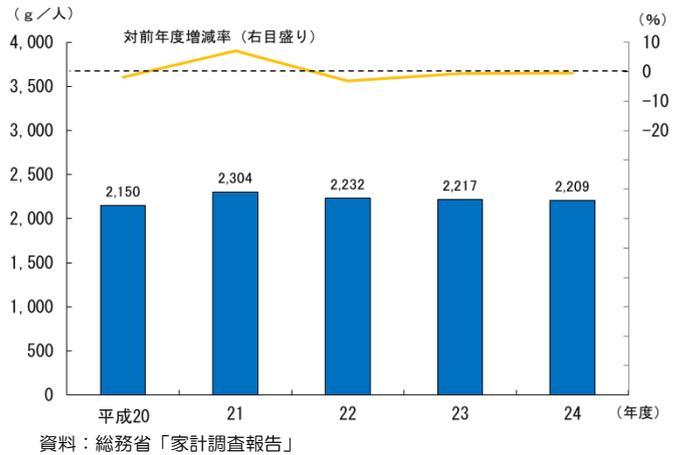


資料：農林水産省「食肉流通統計」、財務省「貿易統計」、農畜産業振興機構調べ  
注：部分肉ベース

## 家計消費

牛肉需要量の約3割を占める家計消費は、15～20年度にかけておおむね減少傾向で推移した。21年度は小売価格が低下したため、牛肉の値ごろ感が高まり、内食化が進展したことなどにより増加した。しかし、22年度は、景気低迷による消費の減退などから1人当たり2,232グラム(前年度比3.1%減)とやや減少し、23年度は、東京電力福島第一原子力発電所事故の発生に伴う放射性セシウム検出問題も加わり、同2,217グラム(同0.7%減)とわずかに減少した。24年度も根強い経済性志向から、同2,209グラム(同0.4%減)と3年連続の減少となった(図6)。

図6 牛肉の家計消費量(1人当たり)



## ◆在庫

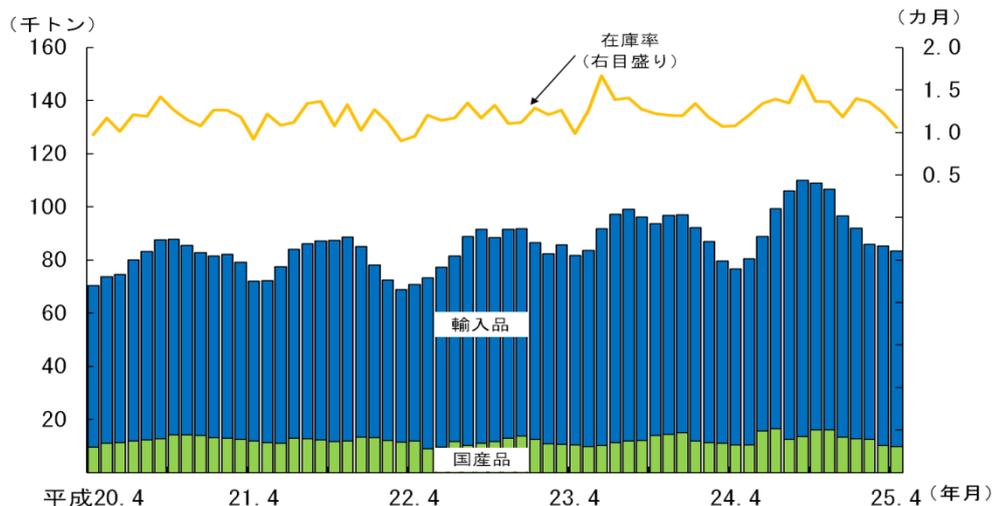
### 24年度の期末在庫、7.2%増加

牛肉の推定期末在庫量については、22年度末は、国産品がかなりの程度減少したものの、輸入品が大幅に増加したことから、全体では8万5900トン(前年度比24.4%増)と、大幅に増加した。23年度は、国産品が1万1400トン(同4.5%増)とやや増加したものの、輸入品が前年の反動により6万8400トン(同8.9%減)と、かなりの程度減少した。その結果、全体では7万9700トン(同7.2%減)とかなりの程

度減少した。24年度は、国産品が1万400トン(同8.4%減)とかなりの程度減少した一方、輸入品が7万5100トン(同9.8%増)とかなりの程度増加した結果、全体では8万5500トン(同7.2%増)とかなりの程度増加した。

なお、24年度の在庫率は1.08～1.67カ月の間で推移した(図7)。

図7 牛肉の推定期末在庫量と在庫率



資料：農畜産業振興機構調べ

注1：在庫率＝在庫量／推定出回り量

2：部分肉ベース

◆枝肉卸売価格(東京・省令)

24年度の卸売価格(省令規格)、162円高のキログラム当たり999円

省令規格

牛枝肉卸売価格(東京・省令)は、22年度は、交雑種の卸売価格の上昇などにより、キログラム当たり1,108円(前年度比9.3%高)と、前年度をかなりの程度上回った。23年度は、牛肉からの放射性セシウム検出による風評被害から、同843円(同23.9%安)と大幅に低下したが、24年度は徐々に回復し、同999円(同18.5%高)と、前年度を大幅に上回った(図8)。

図8 牛肉の卸売価格(東京・省令規格)

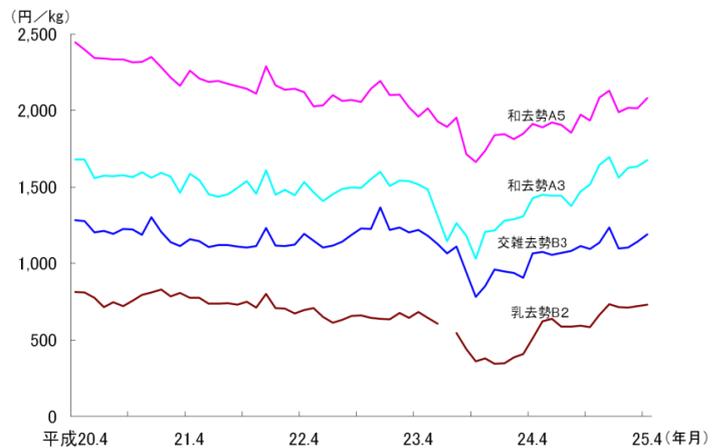


資料：農林水産省「食肉流通統計」  
注1：省令規格は、去勢牛B2とB3の加重平均  
2：消費税を含む

和牛

和牛(去勢)の卸売価格は、22年度は消費低迷などから各等級とも低下し、さらに23年度は、放射性セシウムの検出による風評被害から、A5がキログラム当たり1,852円(前年度比11.3%安)、A3が同1,270円(同15.7%安)と、いずれも大きく低下した。しかし23年度後半から徐々に回復し、24年度はA5が同1,971円(同6.5%高)、A3が同1,525円(同20.1%高)と、いずれも上昇した(図9)。

図9 牛肉の卸売価格(東京・種別)



資料：農林水産省「食肉流通統計」  
注1：消費税を含む  
2：23年7月の乳去勢B3については取引実績がない

乳牛

乳牛(乳用種去勢B2)の卸売価格は、22年度は和牛と同様に消費低迷などからかなり低下した。また、乳牛は3品種の中で放射性セシウムの検出による風評被害が特に大きく影響し、23年度はキログラム当たり458円(前年度比30.1%安)と大幅に低下したが、24年度は同640円(同36.7%高)と、22年度実績に迫る水準まで回復した。

交雑種

交雑種(去勢B3)の卸売価格は、と畜頭数の増加により18年度以降前年度を下回って推移していたが、22年度は、生産量の減少により前年を大幅に上回った。23年度は、他の品種と同じく放射性セシウムの検出による風評被害から、キログラム当たり1,003円(前年度16.3%安)と大幅に低下したものの、24年度は、同1,108円(同10.4%高)と、かなりの程度上昇した。

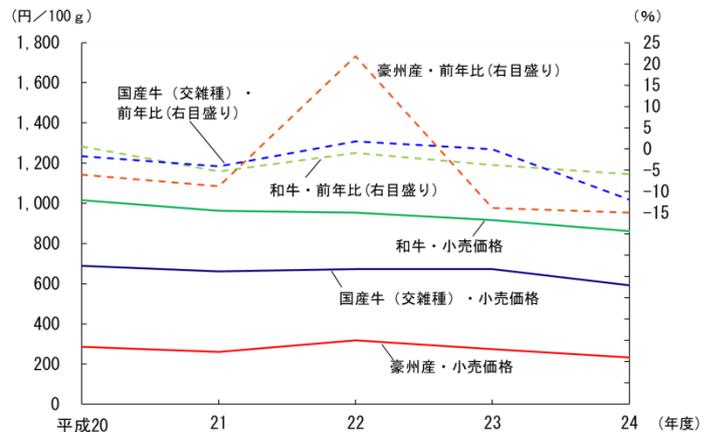
## ◆小売価格

### 24年度の小売価格、国産品、輸入品ともに値下がり

和牛及び国産牛(交雑種)の小売価格(サーロイン、特売価格)は、消費者の経済性志向の高まりにより高級部位が敬遠されたことから、21年度以降下落基調で推移している。和牛は、24年度は100グラム当たり862円(前年度比6.0%安)と、4年連続で低下し、国産牛(交雑種)も、生産量が増加に転じたことから、同593円(同11.9%安)と低下した。

豪州産輸入牛肉は、22年度は、輸入冷蔵品の供給量が減少したことなどから、前年を大幅に上回ったが、23年度は下落に転じ、24年度も同233円(同14.9%安)と、かなり大きく低下した(図10)。

図10 牛肉の小売価格(サーロイン・特売価格)



資料：農畜産業振興機構調べ

注：消費税を含む

## ◆肉用子牛

### 24年度の肉用子牛価格、黒毛和種、褐毛和種、ホルスタイン種で上昇

#### 黒毛和種

黒毛和種の取引価格は、18年度に過去10年間で最も高い水準を記録した後、19年度以降は、枝肉卸売価格の低下などにより下落傾向となった。その後22年度から上昇に転じ、24年度は1頭当たり42万円(前年度比5.3%高)とやや上昇した。取引頭数は、17年度以降増加傾向で推移したが、22年度は、宮崎県における口蹄疫発生の影響により減少した。

23年度以降は若干回復基調となり、24年度も同36万2000頭(同0.6%増)とわずかに増加した(図11)。

#### 褐毛和種

褐毛和種の取引価格は、21年度以降、取引頭数が減少したことなどから引き合いが高まり、24年度は1頭当たり35万8000円(前年度比16.9%高)と大幅に上昇した。

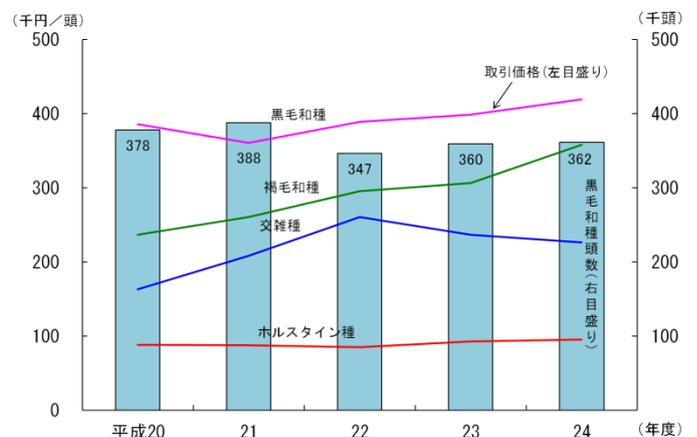
#### ホルスタイン種

ホルスタイン種の取引価格は、19年度以降、枝肉卸売価格の低下などから下落傾向で推移していたが、24年度は、取引頭数が減少したことから引き合いが強まり、1頭当たり9万6000円(前年度比3.3%高)とやや上昇した。

#### 交雑種

交雑種の取引価格は、21年度以降、取引頭数の減少などから上昇傾向で推移していたが、23年度以降は取引頭数の増加により低下し、24年度は1頭当たり22万7000円(前年度比4.3%安)となった。

図11 肉用子牛の市場取引価格と頭数(黒毛和種)



資料：農畜産業振興機構

注：消費税を含む